

〈一般研究課題〉 「誤読」による記憶と記録の共有  
—六甲山の観光と開発の記録から制作する創作研究—  
助成研究者 愛知県立芸術大学 大崎 宣之



「誤読」による記憶と記録の共有  
—六甲山の観光と開発の記録から制作する創作研究—  
大崎 宣之  
(愛知県立芸術大学)

Sharing Memories and Records that Comes from ‘Misreading’  
—Research into creative art made from records of sightseeing and development on Mt. Rokko—  
Nobuyuki Osaki  
(Aichi University of the Arts)

**Abstract :**

In my capacity as a creator in the field of contemporary art, I have spent time contemplating what art can do for social issues. The significance of contemporary art—which seeks to escape preconceived notions as it attempts to create new forms of value—lies in questioning society from a creative perspective. This research project looked at memory and record keeping generated through ‘misreading,’ and sought to ponder the meaning of recollecting and recording memories and the like. The project involved creating and presenting artwork following the thematic concept of “attempts at preserving memories.” To exhibit at Rokko Meets Art 2019 (an outdoor show held at Mt. Rokko), I surveyed photographs held by Mt. Rokko Cable Car & Tourism Company and chose specific display locations. With these as the central motif, I created artwork using the visual effect of “melting pictures.” The works I exhibited were ones that would elicit the memories of viewers and attendees. In the future, I plan to continue offering new works of art that touch on this idea of “memory and recording.”

1. はじめに

執筆者は現代美術のアーティストの立場から社会の問題に対して美術作品で何ができるのかを考えてきた。既成概念から脱却し、新しい価値を創出する試みである現代美術の意義は、作品を通し

て社会に問いを投げかけることにある。本研究では、「誤読」による「記憶と記録」に着目し、「思い出などの記憶や記録」の意味について考え、記憶を残す試みをコンセプトとした作品制作と発表の実践をおこなった。「記憶と記録」については、東日本大震災以降、コミュニティ・アーカイヴと呼ばれる市民参加によるアーカイヴ実践活動や、それらをコンセプトとした展覧会が多く開催されており、「記憶と記録」について考える取り組みがなされてきた。また、現代美術の分野においては、アーティストが主体となって美術館・博物館や図書館などの専門性に即したこれまでのアーカイヴの実践とは異なる「記憶と記録」構築のありかたに注目が集まっている。

本研究は、記憶や記録が持つ流動性や不確かさの可能性に着目している。思い込みや再解釈による変容は、「誤読」と言える。しかしある面では「誤読」こそが、新しい価値を創出するきっかけともなりうるのである。本研究とは、記憶や記録をアート作品として鑑賞者に提案することで、鑑賞者の記憶や記録によって変容すること、すなわち「誤読」が、想像力によって鑑賞者の記録・記憶となり共有されることを目指した創作表現の実践であった。

具体的な方法として、六甲山観光株式会社が保有する、戦前から高度経済成長期にかけての六甲山の観光と開発の記録写真をモチーフにアート作品を制作した。また、この研究の発表として、六甲山で開催された現代美術展「六甲ミーツ・アート 芸術散歩2019」にて作品が発表された。

## 2. 六甲山に関する記録写真の調査

六甲山観光株式会社の協力のもと、同社が保有している数百枚の記録写真や資料の複写をおこなった。六甲山は、明治時代に外国人居留地に滞在した欧米人たちによって開発され、その後官民による開発事業が進み、現在に至っている。現代美術展「六甲ミーツ・アート 芸術散歩2019」を主催する六甲観光株式会社は、摩耶鋼索鉄道株式会社(1922年設立)と六甲越有馬鉄道株式会社(1923年設立)を祖としており、現在も当地のケーブルカーやレジャー施設を運営する企業である<sup>(1,2)</sup>。本研究の目的である作品制作のために、記録の調査として六甲観光株式会社が保有する戦前から高度経済成長期までの古い写真や資料を複写した。(図1.)これらの写真は、過去から現在までの開発の歴史資料として六甲山に関わる出版物や社史の刊行の際に使用され、観光と開発の記録として包括的に見られるものである。また、過去に六甲山で開催されたフェスティバルと思われる写真や従業員同士の会食風景、慰安旅行の写真なども含まれており、この場所に関係した人々の記憶を垣間見ることができる写真も多く含まれていた。



図1. 保管されていた写真の一部

## 3. 展示場所の選定

記録の調査と並行して、鑑賞者が六甲山の記憶と記録に感覚的にアクセスできるような展示場所を探すため、六甲山の施設や展示可能な野外スペースなどを実際に訪れて検討をおこなった。この

検討の際に意識した点は以下の通りである。

- ・六甲山の観光にとって重要であったと思われる場所、もしくは施設
- ・六甲山を訪れた人々が関係した、もしくは関わるがあった場所
- ・古くから存在する場所、もしくは存在した跡地

いくつかの候補のうち、六甲山頂駅(六甲有馬ロープウェー裏六甲線)内にある休止線のプラットホームを会場として選定した。(図2.)このプラットホームは六甲有馬ロープウェー表六甲線であったが、阪神淡路大震災をきっかけに停止し、運行されていない。駅名標も旧駅名である「六甲山頂カンツリー駅」のままに放置され、当時のゴンドラ車体が留め置かれていた。まるで時間が止まった様に感じる場所であった。作品を展示するには非常に特殊な場所であったが、テーマに合致した魅力的な空間であり、場所の特性を活かすアート作品の創作表現の実践である本研究として、この空間は作品を効果的に見せることができると考えた。この場所を展示会場として選定し、会場の雰囲気を生かした展示プランを考える事とした。



図2. 六甲山頂駅にある休止線のプラットホーム

#### 4. 作品および展示のプランニング

今回制作する「誤読」による「記憶と記録」に着目した作品とは、記憶や記録が持つ流動性や不確かさの可能性に着目した作品である。記憶と記録が持つ流動性や不確かさについて、経験則に基づく、過去に経験した物事や出来事は、それそのものではなく、実際には思い込みなどによって現在の自身から生み出されている。また、記録についても読み手が変わることにより、再解釈され機能していく面がある。こうした「記録・記憶→作品」から鑑賞者自身の「作品→記録・記憶」に読み直される媒体とした表現手法を試みた。作品から想起する鑑賞者の記録・記憶を「思い出」として読み直すことで共有することは可能か？というアートとしての問いである。

##### 4.1 展示と作品プランの策定

展示会場を、休憩ができる憩いの場として機能することを計画の基本とした。これは、様々な場所に点在する作品をオリエンテーリングのように巡る展覧会の性質を考え、休憩所スポットとして機能することで、ゆっくりと鑑賞できる空間になることを意識したものである。こうした場を設定することで、集積した記憶を呼び起こすようなインスタレーション(空間芸術)の展開を狙った。具

体的には、空間そのものから受ける印象を取り入れることで、視覚情報だけではなく体感的な相互作用によって六甲山の記憶に触れるような鑑賞体験ができる仕組みを目指したものであった。モチーフとして、記録の調査で複写した写真を使用した作品を、プラットホーム、 Gondola車体、操作室に設置する。この空間から感じる鑑賞体験により、鑑賞者の記憶に作用する効果を生み出すことにした。このような案から具体的な作品プランを策定した。

## 4.2 表現方法について

独自の表現手法である「溶ける絵画」表現を用いた写真作品や映像作品を制作する。これは描かれたイメージが水に溶け出し流水となって流れ出していく様子を撮影する作品であるが、記憶の曖昧さや認識の曖昧さを伴って鑑賞者の経験や記憶に干渉する作用を狙ったものである。また、休憩所として機能するオブジェとして、ベンチ状の作品を配置する。時間が止まっているかのような雰囲気を持つ会場を、まるで時間が動き出すようなイメージへと変化させる表現として駅名標や車内に電気を引き入れて光らせる。このようなアイデアから展示の設計図となるブランドローイングを作成した。(図3.)



## 5. 作品の制作

ブランドローイングをもとに、再度現場を確認し、作品の制作をおこなった。

### 5.1 ベンチ状の作品の制作

ベンチとして使用できる簡単な形態にし、六甲山の古いパンフレットや写真を表面のイメージとして使用した。素材や構造は、半屋外かつ展示期間が約3ヶ月間の長期間になるため、作品の保全について十分に考える必要があった。山の天気の特徴として、気候変化が激しいことや、強風や大雨、湿度が高い、といった強いストレスが作品に加わることから、当初想定していた素材より強度と耐候性を持つ素材を使用した。合板の木口に耐水性の高い塗料の塗布をおこない、耐候水性を持ったインクジェットプリントシートを貼り付けた。台風の際には解体、組み立てができることを考慮した構造で制作をおこなった。(図4.5.)



図4. ベンチ状の作品の制作



図5. シートの貼り付け

## 5.2 映像および写真作品の制作

ゴンドラ車内に展示する写真作品、操作室内と映像イベントで展示する映像作品の制作をおこなう。これらの作品は、複写した写真を下敷きにし、水彩絵の具で絵を描き、水槽内で溶けていく様子を撮影する「溶ける絵画」表現を用いておこなった。(図6.7.8.)



図6. 溶ける絵画の制作 絵が溶けていく過程をビデオやカメラで撮影を行う

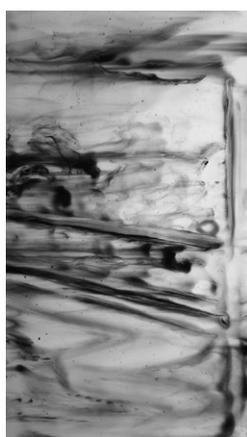


図7. 溶ける絵画の映像作品(映像スチル)



図8. 元になった写真

## 5.3 作品の展示、設営

会場そのものを作品としたインスタレーションとして、展示設営をおこなった。(図9.)現状復帰を考慮した作品や部材の固定、組み立てをおこなう。ベンチ状の作品をプラットフォームに設置し、仮設的に柱を組み操作室に液晶モニターを取り付ける。駅名標やゴンドラ車内に外部電源を引き入れて蛍光灯を設置し、ゴンドラ車内のガラス面に「溶ける絵画」の写真作品を展示、乗車席が展示

ケースになるよう造作して、記録写真の展示をおこなった。このように展示空間のいたるところに作品が展示され、鑑賞者が空間を巡ることで六甲山の記憶に触れることを想定したインスタレーションが完成した。(図10.11.)また会期中、夜間イベントを開催し、映像インスタレーション作品を展示した。(図12.)



図9. 展示設営



図10. 作品名《マルチプル ライティング(六甲山の記憶から)》



図11. ゴンドラ車内の展示の様子 窓に写真作品、乗車席の一部に記録写真を展示



図12. 映像イベントの展示風景

## 6. まとめ

本研究では、六甲山の観光と開発の記録から制作する創作研究として、六甲観光株式会社が保有する記録写真の調査と、六甲山の過去の記憶を想起させるような空間を利用し、「誤読」による「記憶と記録」に着目したアート作品の制作と展示、発表の実践をおこなった。作品を介して鑑賞者から過去の思い出について聞く機会もあり、作品を媒体とした記憶を誘発する作品となった。六甲観光株式会社が保有する記録写真は、当地の観光と開発の歴史を辿ることができる資料として価値が高い。本研究によって、六甲山の歴史を包括する多数の記録写真を利用し、場所性においてもその歴史にまつわる会場で作品を発表できた経験は、記憶や記録が持つ流動性や不確かさの可能性に着目するアート作品を制作する創作研究の今後の展開に、新しい視野をもたらす機会となった。本作は、展覧会の紹介記事<sup>(3)</sup>にも取り上げられており、アート作品として一定の評価を得たと考えている。アート作品による記憶や記録、思い出を共有することによる「記憶を残す試み」は、未来について考えることに繋がる。今後も人々の「記憶と記録」に着目した新しいアート作品の提案を継続していく所存である。

## 参考文献

1. 六甲ケーブル50年史 六甲とともに五十年、六甲摩耶鉄道株式会社、六甲摩耶鉄道株式会社社史編集委員会、1982年
2. 六甲山観光株式会社 <https://www.rokkosan.com/administer>
3. WEB版 美術手帖『10回目の節目。伊藤存、榎忠ら42組が参加する「六甲ミーツ・アート 芸術散歩」が開幕』 <https://bijutsutecho.com/magazine/news/report/20541>

## 展覧会開催概要

・『六甲ミーツ・アート 芸術散歩2019』

会期：2019年9月13日～11月24日 | 会場：六甲ガーデンテラス、自然体感展望台 六甲枝垂れ、六甲山カントリーハウス、六甲高山植物園、六甲オルゴールミュージアム、六甲ケーブル、天覧台、風の教会(グランドホテル 六甲スカイヴィラ会場含む)、六甲有馬ロープウェー(六甲山頂駅)、記念碑台(六甲山ビジターセンター) | 主催：六甲山観光株式会社、阪神電気鉄道株式会社 | 総合ディレクター：高見澤清隆(六甲オルゴールミュージアム シニアディレクター)

<https://www.rokkosan.com/art2019/>

映像イベント | 『野外上映「マルチプルライティング(六甲山の記録から)映像インスタレーション』開催日 | 2019年11月2日 17:30～20:00